

保育の心

松下昌義

途上社

保 育 の 心

昭和53年12月

著 者 松 下 昌 義
発 行 所 途 上 社

京都市左京区下鴨南茶の木町29

頒 価 450 円

はじめに

ここにおさめた文章は、日頃園児のお母様がたと接していて、たびたび育児の問題として出されることがらを、「保育の心」に記したものです。

限られた紙面に記した文章なので、各項目について深くほりさげることは出来ませんが、お母さまがたが、各項目にある問題にぶつかり、自からの育児態度について反省し、工夫し、賢くお子さんに接していただける端緒になればと願っています。

一九七八年十二月

松 下 昌 義

目次

一、なぜ幼稚園にゆかせるか	一
一、遊びと勉強	四
一、全人教育	六
一、子どもをみつめる	〇
一、文字の学習について	三
一、こづかいについて	六
一、おちつきのない子	八
一、検査その他のこと	一一
一、よい子 わるい子	二四
一、幼児の画	二七
一、のろまな子 ぐずの子	二九

一、たくましい子ども	三二
一、言葉づかい	三五
一、情緒不安定児	三八
一、柔かい布地を偏愛する子	四一
一、子どものけんか	四四
一、強情でいいだしたらきかない子ども	四六
一、偏食をする子ども	四九
一、伝言について	五二
一、六才児は更年期	五五
一、自立	五七
一、カルタとり大会	六〇
一、幼児の着衣行動について	六三
一、あきっぱい子にしないために	六六

一、よく考える子ども	……	六九
一、数詞の指導について	……	七二
一、数の分解について	……	七四
一、食事のしつけ	……	七七
一、幼児としてのぞましい絵	その1	八〇
一、幼児としてのぞましい絵	その2	八三
一、のぞましい絵を描くために	……	八六

なぜ幼稚園にゆかせるのか？

今日の日本では、こどもが四・五才になれば、そのほとんどが定まったように幼稚園か保育所に行くようになりました。しかし、幼稚園へ何のためにゆかせるのかという目的や理由については、もうひとつ多くの親たちには明確でないようがあります。

「近所みんながゆくからわたしの子もゆかせないとほずかしい、子どもがかわいそうだから」案外こんな理由で幼稚園に子どもをゆかせている親が多いのではないのでしょうか。そこで今日は、幼稚園に子どもをゆかせる目的について考えてみることにしました。

大きく分けて理由、目的は二つあります。一つは「しつけ」ということです。特に自立的生活習慣のしつけ、つまり、自分でできることは自分でするしつけです。そして特に、食事・睡眠・排便・着衣・清潔・安全についてのしつけを基本的・自立的・生活習慣と呼んで園では力を入れて指導します。そんなことならうちの子どもは出来るし、特に園にゆかせる必要はないのではないかと思われるかもしれませんが、そうなのです。家庭でしっかり指

導していただかねばなりません。でも幼稚園での集団の生活を経験させることによつて
＼お母さんやお家の人々に頼つてはいけけないのだ＼ 自分でやらねばならないのだ＼
という自覚と動作を身に心につけるのです。

さて第二の理由・目的は「遊び」ということです。遊ばせるためなら幼稚園に行く必要
などないのと思われるかも知れません。しかし幼児の場合は遊びが学習行為なのです。
遊びを通して自然のうちに規律ある生活を身につけ、他人に迷惑をかけない行動を学びと
るのです。更に友だちとの遊び、いろいろな物を使っての遊びを通して記憶すること・理
解すること・想像すること・判断すること・ものともとの関係や人と人との関係を知る
こと・考えること・推理すること・思考力を練ること創造性を養うこと・自主性や実行力
を身につけさせることなどの、やさしい心・ゆたかな感情と知的な両面のことを学びとつ
て行くのです。特に白百合ホームでは、豊かで、思いやり深い感情を育てることに力点を
おいて保育をしています。（これらについては他日記してみたいと思っています。）

以上のような幼稚園の保育についての考えを理解していない大人たちは、ついつい、子

どもが幼稚園に行ったのだから、いろいろなことを覚えてくるだろうと // きょうは何をし
たか // と根掘り葉掘り聞きたてます。

子どもはその時その時力一ぱい行動するのです。そこで何かを習得しているのです。そ
れだけです。ですから後から聞いても忘れてしまっています。大切なことは精一ぱい遊ぶ
ということです。

ですから、よい幼稚園とは、ただやたらと遊ばせておくというのではなく、遊ぶことに
よって、よりよく幼児が、心と身と知能面を養い育てられるような指導と配慮がされてい
る園だと言えます。

「自から発育すべき素質をもっている種子が、園丁の注意深い保護によって発芽し、完
全に発育させるところ」が幼児の遊びの園（キンダーガーデン）即ち幼稚園です。そして
この注意深い保護とは、家庭的（ホーム的）な愛情でなければなりません。

遊 び と 勉 強

先の保育の心1号に於て、幼児の遊びは学習行為なのだということを申し上げましたが、親はこのことをよく知っておいていただきたいと思えます。なぜなら、大人たちは「遊ぶ」というと何か時間の無駄使いのように思ってしまうからです。つまり遊んでいては子どもはかしくくならない、と考えてしまうのです。ですから絵や字をかき、本を読み、数の計算でもしていれば、遊ばないで勉強をしている、と思ひ込んでいます。

この考えは幼児の場合全く誤りであつて、幼児は、よく遊ぶことで成長して行くのです。幼児は少しの間もじつとしておりません。何かに触れ、何かを見、立ったり、座ったり、走ったり、……これらは自分の身体を試し、知識を得るための学習行為をしているのです。そのうちに子どもの遊びは少しずつ複雑になつて行きます。つまり工夫し努力し、よりむつかしい課題にとりくむことの楽しさ、それをやりとげることの快さを味うのです。こうして努力すること、忍耐すること、完成すること、工夫することを学びとつて行くのです。

ところが、親が保護しすぎて子どもに、自由な遊びをさせてやらないと、ゆわゆる温室育ちとなり、忍耐力や努力すること工夫することなどを欠き、安易な方へ安易な方へと逃げて行くようになります。

また、あまりにも、清潔せいじやくしすぎる親は、子どもの自由な遊びをうばってしまい、いじけた理屈りくつやになってしまいます。

さらに、子どもが求め望んでもいないのに仕事とか勉強の課題を与え強制したりするとやはり、いじけた神経質な子どもになってしまいます。

幼児期には未だ義務意識や課題意識はありません。幼児は興味と欲求によって行動するので。

従ってよい育児 保育方法とは、子どもの興味と欲求に従って、つまり遊びという楽しさの中で、よりよいものを与え、導くことです。そして第一に楽しくやったことをほめてやり受け入れてやることです。そして更に適切な指導（サゼスチョン）を与えてやるのです。「まあ よくできたわね!! もう一度してごらん」「まあ お母さんうれしいわ!!

「ただどこをこうすればもっとうれしい」……。

大切なことは、子どもが将来に於て、自分に与えられた課題や責任、又は困難に対して正しく対処し克服でき得る知恵と精神力をつちかうことです。

親は時として目先のことのみ考え、カッコよいことに眼をうばわれ、又心配しすぎて手をかし、よく育てようとする心とは反対に、かえって子どもをだめにしてしまいがちです。深く反省してほしいと思います。

全 人 教 育 — 感 情 を 育 て る —

強い身体・正確な知識・豊かな感情・しっかりした意志などをかねそなえる人間であるということを願う教育を全人教育といえます。

知の力がよくはたらいても豊かな感情が伴わなければ冷血漢になってしまいます。

また、するどく知がはたらき、豊かな感情が伴っても、弱い意志力しかもっていないければ、せつかくの知も情も充分なはたらきをすることができません。勿論、身体が病弱であつても困ります。

幼児期というものは、これらの知・情・意などの基礎になるところの部分が養なわれる時期であります。

先日行いましたお母さんの勉強会でもお話ししました通り「小さいころに受けた感化はその人間の人がらの地づらとなる」のです。特に感情と意志などは地づらとなって残ってゆきます。

しかし、今日の世の若いお母さんやお父さんたちは、この大切なことにあまり注意をはらおうとはせずに、字が読める書ける、数がどうの……ということばかりに関心を向けています。

豊かな感情とはどういう感情なのでしょう。一口に言うのは仲々むづかしいですが、

正しいこと善なること美しいもの聖なるものを求め理解し共感できる心、とても申せましよう。

これを幼児の場合で申しますと、やさしい心、親切な思い、ありがとうございますと云える感謝する敬虔な心とそれらの行いであります。白百合ホームでは、それをイエス・キリストの教えとその心にもとづいて行っています。

感情というものは「反応の原理」によってつちかわれます。

例えば、こちらがニコニコすると相手もニコニコします。また、こちらがムツとしていると相手もムツとします。

ですから親が感激家であると子どもも感激家になります。

「まあ、美しい花だこと」と花に接する親の姿を見て、その子どもも同じように花に接し、その感情を深めてゆきます。

このように、豊かな感情を育てるということは、育てる人の態度が大きな影響を与えます。

感情の教育は口・ち・さ・きで命令したり教えたりすることによっては絶対にできません。

わたしたちが成人した今、静かに自分の人がらを形ちづくっている性格傾向とか感情の表出方法とか、ものごとに関わって行くさまを反省的に思いみるとき、その地づらは幼児期につちかわれたものであることがわかります。

「親の・か・お・が・み・た・い」という本がありました。親がその子どもに与え植えつけたものは、一生その子どもの生活からぬけだせぬものとして、その子どもの人生を支配します。

親である私たちは人間としての成長を子どものためにも、自分自身のためにも、自分の周囲の人々のためにも願わねばなりません。

白百合ホームの園集団は只幼児のためだけのものではなく、親の成長のためにも相互に努力したいと願っています。

子・ど・も・を・み・つ・め・る・

「子どもは、現在伸びつつあり、発達しつつある力やはたらきを自発的に使用する衝動をもつものである。したがって、子どもの教育は、この事実にしたがってなされるべきである」これは有名な児童心理学者ジャーシルドの言葉です。

たしかに、子どもの成長発達をみていますと「^は這いなさい」と命令しなくても自^{おの}と這いだしますし、更に歩くために自^かから努力し、歩けるようになる、倒れて痛い思いをして歩こうとつとめます。そんな場合親が手を出しますと、ふりきって歩こうとします。また、知的な能力が子どものうちに芽え出しますと、やたらと質問したり、自から探索行動をし、ものをためしてみたりします。又、想像力が芽えのびる時期には、ごっこ遊びに夢中になりますし、言語能力が伸び出ようとするときには、はためではうるさいほどよくしやべり、言葉の表現の能力を身につけます。その他記憶力が発達するときにはあきれられるほど、人の名前や物についてよく暗記しているものです。

そこで、我々親は、子どもの行動様子をよく見ていて、「うちの子どもは、今何が芽え伸びているのか」ということを理解してやらねばなりません。

つまり、子どもは、誰に教えられ、命令されずとも、その成長の時期／＼に於て、自発的に興味と関心の対象をもって、そのことに一生懸命になるのです。これは、子どもの勉強であり学習なのです。

ですから親たる私たちは、その子どもの関心の何たるかをよく理解してやり、よりよくその時の興味を伸ばすような、手だすけを、してやらねばならないのです。

ところが、私たち親は、ときとして、その子どもが今伸びようとして興味をいだいていることがらをさせないで、親の思うこと、親の願いを子どもにおしつけ子ども自身の内に何の準備も出来ていないことを「それやれ」「これやれ」と無理におしつけ、子どもをいじけさせてしまいがちです。

また反面、切角伸びようとする能力が内に芽え、子どもはいろ／＼とうったえているのに、親の無関心からほったらかしにしておいて、伸びるものも伸ばさずじまいで終ってし

まうことがあるのです。

よく動くときには、よりよく動かさせてやって下さい。よくおしゃべりするときには、よりよく聞き答えて、おしゃべりをさせてやって下さい……。

こんなことを考えながら、ふとルソーの言葉を思い出しました。

「万物をつくる神の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手につるとすべてが悪くなる……。人間は何一つ自然がつくったままにしておかない」（エミール）
今の時代の教育は、教育という人間の人工によって、人間を悪くしているのかもしれない。親は決して愛情という名のもので、子どもを悪くしてしまっはいいけません。

文字の学習について

「○○ちゃんは平仮名が全部読めて書けるんですって！」「××ちゃんは漢字も読めるんですって!!」。

よその子の、こんな話を聞いて、同じ年令でありながら漢字はおろか、平仮名だって読めも書けもしない吾が子を見て「これでよいのかしら」と、つい不安になってしまうのが世のお母さんがたです。

そのようなお母さんに対して、いつも「心配なさる必要はありません」と、わたしは申しあげています。

たしかに近年子どもをとりまく文化的知的刺激も多様化し、字を読んだり書いたりする能力も三〇年程前と比べると一年ほど早くなっているようです。こんな平均的理由からも、五才で小学校に就学させたらという声も起って来るのだと思います。（この点については私は七才就学がよいと考えている）。

それにしても、文字に興味を示す時期には個人差がありますし、小学生の兄や姉のあるなし又その子どもをとりまく家庭環境などによっても差がでて来ます。

私たちの園の様子からは、だいたい「ゆりぐみ」頃になると文字に対する興味が一般に起つて来るようです。そこで、その興味を育てるという意味から絵本観察時だとか、また当番の連絡ノートくばり、当番表の掲示などを通して、じよじよに無理なく遊びという学習を通して、その興味に応えたと共に育てて行くことを行っています。そして二学期頃になると、国語のノートを用いて、文字書き遊びをして、正しく文字を書くことを学習しています。そして三学期のはじめに來る正月用のカルタ遊びで、いよいよたのしく文字を覚えてあそぶようにしています。

こうしてたいの子は文字を覚え書けるようになります。

ところで、実際文字が書けるか書けないか、ということは余り大した問題ではないのです。幼児の教育にとって大切なことは『ことに面してその子なりにしつかりと対処できるような能力を身につけているか否か』ということなのです。よく聞き、よく考え、よく応じ、

よく自分を発表出来、よく創る、ことが出来るように教育され訓練されているか否かというところが最も大切です。

この態度が身につけていければ一年生になればなつたその場でガンバリ二年生になれば二年生のその場でガンバルのです。

一年生の時に二年生のことが出来たからといって誇らしく思うことは間違いです。

今文字が読めなくても、書けなくとも失望したり、不安がったりする必要など少しもありません。それより、今子どもが、思いきり楽しく遊んでいるか。友だちや先生に自分の考えや思いを自由にハッキリと発表できるか。よく友だちの言うことを先生の語ることを聞いているか。やるときにはしっかりとやれるか。そんなところを遊びの中で、園の生活の中で見ていて、不足しているところを、はげまし助け導いてやりたいものです。そんな子は文字を学習しなければならぬ時が来れば一ぺんに自分のものとなります。

こづかいについで

お母さんがたとお話しをされていて、話題になる一つは、幼児とお金ということでした。

「○○さんのお子さんにつれられて、おかしを店に買いに行ってから、うちの子もお金をほしがりますが、与えてよいものかどうか心配です」。

ある家庭では、すでにこづかいを与えており、ある家庭では、おやつなど母親が与えて、こづかいは一切与えていない。ところが、この子らが一諸に遊び、一方の子の買いぐいに感化され、一方の子の親が非常に困る。といった問題。これをめぐってお母さんの間で、いろいろな意見が出て、その間の調整をどのようにしたらよいかという問題。

結論的に申しますと、与えられたこづかいをうまく使いこなせるようになるのは、小学校も三、四年生になつてからです。一般に幼児の段階ではお金の大切さ、また役割ということとは理解していません。ですから、母親は、それらのことを教える意味からも、一緒に買物に連れて行ったり、一緒に買物をして、一〇円、二〇円という、お金の単位を覚えさ

せると同時に、お金の大切さや役割などを具体的に教えて行くことが必要です。

つまり、おこづかいを与える前に、その準備的なことをしておくということです。

したがって、幼児ひとりで自由に買い食いなどさせない方がよいと思います。準備なくしてお金を与えたりしますと、お金と物との交換のおもしろさだけを知って、お金の大切さを知らず、その交換のおもしろさのみに引かれて、与えられるお金では満足できず、ついお母さんのさいふから百円、千円ともちだすようにならないともかぎりません。

もし、お金を与えるような場合には、一日に使う額はきめて、それ以上は絶対に与えず、何に使ったかよくよく見定め、きまった額のお金を、どのように使うことが最も効果的かを考えさせるようにして下さい。

また、がまんして、お金をためておくことによって、より大きくよいものが買えるのだということも教えたいものです。

いずれにしても、やがてこどもは、こずかいを親よりもらい使うようになります。その時、正しくお金を使える態度をつけておいてやるのが大切です。これは親の金銭に対す

る態度に責任があります。

おちつきのない子

「おちつきがない」、「集中力が足りない」、「根気がない」などは、世のお母さんが吾が子についてもっている心配ごとの最も多いものです。しかし、子どもは、もともと活動力がさかんで、少しの間もじっとしてはおらず、食べる時と、ねている時だけ静かな者です。子どもにとって活動することは勉強していることなのです。

ただ、心の不安定さから来る「おちつきのなさ」や「集中力の不足」「注意散漫」また「気移り」などは、その子どもの心を不安定にしているものをとりのぞいてやらねばなりません。

おちつきのなさは、その人の生来の素質もありますが、だいたいは、幼いときから子どもをとりまいて来た生活の環境の力によるものがほとんどであります。

即ち、人の出入りの多い家庭、多人数の家族などで子どもが、たえずにぎやかな音に接し、声をかけられたり、たえず注意されたりする干渉が多くあったりして、子ども自身おつとりとする間がもてず、心が不安定になり、一つのことに興味が長つづきしなくなり、おちつきのない状態が生じて参ります。

また、多くのオモチャを次々と与えたりしても、次々と興味がうつり変って、一つのものでじっくりと遊ぶ心が養われないことになるのです。

更に、お母さん、お父さんのしつけ方の相違や、お母さんのしつけ方が日によって変わる、つまり気分的であったりすることも、子どもの心を不安定にさせ緊張させてしまいます。

結局「おちつきのある子」「集中力のある子」に子どもを育てて行こうと思うなら、一日の中で一度は必ず静かな休息の時を親と子でもつことです。

お母さんと一緒に本を見るとか、子どもの話をゆったりした気分でも聞いてやるとか、

美しい音楽に耳を傾けるとか、とにかく、おちついた家庭のふんいきを作り、子どもの心の緊張をほぐしてやり、安定させてやることです。

白百合ホームの保育の眼目の一つは「活ばつであるが、落ちついてものごとをよく考える子どもとなる」ということです。

右のような性格は、その子どもにとって、一つの大きな資本となるのです。

学校での教科を学習するとき、又は日常でのいろいろなことに対するとき、落ちついて正しくよく対処できるといふことは、何よりも大切なことであります。

口やかましく、ことさらに干渉をするとき、こどもは自信を失い、不満をもち興奮しやすい子になったり乱暴な子になったりもするものです。

とにかく、今からなら性格は修正できます。子どもの一生のことを思い、その責任に於ても親はしっかり子育てをして行かねばなりません。

検査その他のことについて

白百合ホームでは、園児の知・情・意及び体力などについて、およそのことを知って、それを各々の保育のうえで役だてたいと思ひ、いろいろな検査をしています。

現在、白百合ホームで行っています検査は次の通りです。

- ① 武政ビネー知能検査（ゆりぐみのみ）
- ② 団体知能検査（ゆりぐみのみ）
- ③ 性格診断検査（年二回）
- ④ 日本保育学会扱（幼児発達検査）（年一回）
- ⑤ 社会成熟度診断検査（年一回）
- ⑥ 親子関係診断テスト（年一回）
- ⑦ クレペリン検査（精神作業検査）年二回但しゆりぐみのみ
- ⑧ 運動能力テスト（年一回）

⑨ その他必要に応じて二種類あり

(注 現在一般の園では、これだけの検査は、ほとんどしていません。)

これらの検査によって、子どものすべてが理解出来るということはありません。ただおよそのことがわかることはたしかで、このおよそのことがわかるということは、保育をして行くうえで非常に大切なのです。

白百合ホームでは決して一ぱからげの保育はしておりません。

検査や日常の保育で知った各々の子どもの問題点、よき点を見て、それに適した保育を全体の中で一人一人にしているのです。一人の子どもがよくなることは、その子どものために教師一同心の底から喜びます。

しかし、いくら検査してその子どもの問題点を見つけ適切な保育をすすめて行くこととしても家庭で協力願えなければ、すべてが失敗に終わります。私たちは、この悲しくも、ほら嬉しいことを過去何回も体験して来ました。

各家庭には、それぞれの事情もあり、わかかっていても協力できないということもありま

しようし、問題は仲々すんなりと行かないこともわかっております。それにしても、私たちが望むことは、第一に、園の保育への信頼です。園と家庭との間に信頼がないならば保育は成りたちません。保育（教育）は両者の信頼のうえに成りたつものです。そして第二のことは、各々の家庭の状況のもとでの協力ということです。

右の二つのことを一口で言うならば「共に保育をすすめる」ということです。この「共に」ということは、ただ園とその家庭というに止まらず、園全体（子供全体・教師全体・親全体）で共に各々の子どもを保育しようという心がけがなくてはなりません。決して相互に足の引っぱりあいのようなことをしたり、グループ同志の対抗があったりするようでは、全体がだめになり結局共倒れになりますので、こんなことはあってはなりません。子どもは、一人で良く成長しません。友だちが良くなることにより、その子も良くなり、全体が良くなるのです。

よい子・わるい子

親なればだれしも、自分の子どもが「よい子」に育ってくれることを願います。

しかし「よい子」とは一体どういう子のことを言うのかということになると、少し意見が分れるように思いますが、一般的には「親の言うことを素直にきき、それに従う子」が「よい子」ということになっているのではないのでしょうか。

ですから、子どもが幼稚園などに行くようになってから急にきかん坊になったり、何でも反対の理くつを言ったりそのような態度に出て、以前のような「素直さ」がなくなったりしますと、「うちの子は園に行くようになって悪くなった」と言って嘆くお母さんがおられます。

しかし、実は、そのお母さんは嘆くよりも、喜ばねばならないのです。その理由は、子どもが今まで、すべて親がかりであったのが、自分で考え、自分で判断し、自分の意見をもって、自分で語り、自分で行動しようとしはじめた証拠だからです。つまり一個の自

我が独立し確立しはじめたということなのです。

この自我の確立の時期を「反抗期」と心理学ではいっています。年令的には三才後半より五才頃の子どもに起り、昔し流で言えば「五つ六つは憎まれざかり」と言うことになるのです。

もし、あなたのお子さんが次のようでしたら、あなたはどうかしますか。

小学校の五年六年、又中学生、高校生になっても、自分で考えず判断せず、自分の主張をもたず、何ごとも親からの指示を求めて行動し、困ったことには、しりごみをする子どもであつたら。きっとあなたは「自分で考えて、しっかりとやりなさい」と叱りつけるにちがいないと思います。このような子が大人になって社会に出ると、しっかりと問題をみすえ、それにとりくみ働いて行く大人になることは出来ません。

この時期の子どものとりあつかい方は、とても重要です。

とりあつかい方として考えておくべきことは、① よく子どもの言うことを聞いてやること。② しかし、子どもの要求や主張が、親として受けいれられなければ、理由を言っ

て、はっきりと「ダメ！」ということ。③ 子どもが可愛相だと思って、その要求を何でも通してしまっていると、子どもは、がまんすること、努力することが出来ない子になってしまいます。④ 何でも頭ごなしに叱り拒否することは最低のやり方です。

とにかく、この時期の取りあつかい方に失敗すると、学童期や青年初期に困った行動が生じたりします。

白百合ホームの目ざす望ましい人間像の一つは、将来お子さまが、ことへのぞんで、「よし、一つやったるぞ」と勇ましく、問題に己れをぶつけ、それを克服して行けるような、正しい判断力と強い意志力をもった人間となっていたことです。その地面（じぶら）は幼児期の反抗期のとりあつかい方によって一つは決まります。

幼児の画 — 秋の画展によせて —

子どもは園で絵を画く時をもちます。画紙が与えられ教師の指導によって、クレヨン、クレパス、絵の具（ポスターカラー）等で絵を画きます。

この時、教師は子どもたちがじょうずな絵を画いてくれることを願って指導はしません。教師の願いは、子どもが、のびのびと与えられた画紙の上に画いてくれることです。

のびのびと、表現の喜びを味いながら画いた絵は、必ずしも、じょうずな絵とは限りません。おとなの絵に近いような器用な絵、つまり、じょうずな絵を幼児に画かそうなどと、決して思つてはなりません。卒直に自分の思うまま、感じるままに画いていること、つまり、のびのび画いていることが大切なのです。

ところが、幼児の誰れもがのびのびと画けるかというと決してそうではありません。

幼児の画は、その幼児の心の窓だ、と言つた人がありますが本当に、幼児に画紙を与えて絵を画かせたならば、その幼児の心の内がだいたい解ります。

活動的で元気のいい子は、力強くかきます。内気で淋しい子は、色もうすく、小さくかきます。社交的な子は、絵もにぎやかに画きます。気もちが固く常に良い子でなくてはならぬと言われ、自分もそのように努力して形にはまった子は、いつも形の一定した人形のような人、花、家しか画こうとはしません。知的な子は、内容の豊富な絵をかきます。

さらに、色の選び方、画、線の形や様子などによって、その子どもの心のこまかい様子状態などがわかります。

幼児の画は、その子の心の内と外の全体が表れているのです。

従って、子ども達が、のびのびと絵を画いてくれるようにという教師の願いは、ほかでもなく、幼児達の人格が明るく、のびのびと成長してくれるようにという願いであります。幼児の絵は、その幼児の心の窓だと申しましたが、反面、絵を画かせることによって、幼児の心を正すことができますのです。

内気で淋しい子をはげまし、なぐさめ、力づけながら、力強く画紙に自分を表現させることにより、活動的で元気のいい子どもにすることができのです。

根気のない子を、画紙にクレパスで自由におもしろく画かせつけ、自分を表現する楽しさを味わせることにより、根気のある子に変えて行くことだって出来るのです。

又、画いて行く内に、表現のいろいろな困難に出会い、工夫して、それを克服することにより、思考力、創造力を養うこともできるのです。

白百合ホームでは、十一月末に全園児の画展を開きますが、以上述べたことなど参考にして、ごらん下さると共に、各ご家庭での、子どもに対する絵の評価を下す参考にして下さい。

の ろ ま な 子 ・ ぐ ず の 子

「のろまな子」「ぐずの子」というのは、例えば、洋服を着るのに黙って放っておくと、いつまでたっても着ないで、服をもってうろろろしている子のことを指して言うようです。

こうしたのろまな子は一般に、親が世話をやきすぎ、その子に親への依頼心、つまりお母さんがしてくれるという心をうえつけてしまった結果だと言われております。

ところで、親の世話のやきすぎにもいろいろあって、吾が子可愛い／＼の余り、何でもしてやるというお母さん、そうかと思うと、せつかちで、いいかげんなことはきらいという几帳面な性格のゆえに、さっさとしない子の所作にじれったさを感じてつい「おそいわね　こちらにいらっしやい」と言っ、手を出してしまうお母さん。

これらのお母さんのどこがまちがっているのでしょうか。

これらのお母さんがなさっていることは、子どもが着衣する学習のじやまをしている。ということなのです。これでは、いつまでたっても上手になることは出来ません。それどころか、依頼心をますますもち、自信を失い、やる気を無くしてしまうばかりです。

「のろまな子」や「ぐずの子」というのは、そのほとんどが子どもをとりまく大人がそのようにしてしまったのです。

何事でも上達するためには練習をし学習をしなければなりません。親はその機会を子ど

もにより多く与えてやる責任をもっているのです。そしてその場合「えらいわね」「よく出来たわね」と、やったことを認めてやり、ほめたり、励ましてやるのです。そうすれば「よし もっとがんばろう」と子どもはうれしくなっただけではげむことでしょう。

問題は、単に服を着るといふことだけではありません。以上のことは、子どもを育てて行く場合のすべてにあてはまることであつて、お母さんはよくよく反省してみたいものです。

さて、ぐずぐずして依頼心の強い子どもは、ときとして努力する子でなく、また精神的に集中力を欠く子である場合が多いようです。

園に於ても朝、登園して来ると通園のユニホームと白の園内着に着がえませんが、ある子は、いつまでもユニホームを半分程ぬいだままで別なことをしたり、うろうろしています。つまり着がえることに集中して努力せず着がえを中途半端にして別なことをしている。このような子は、他の仕事や作業に於ても同じような傾向がうかがえます。

それにしても、ぐずとかのろとか言うことと「一生懸命に確実に努力してやるが、ただ

おそい。ということとは別なことです。このことについては他日考えてみたいと思います。

た く ま し い 子 ど も

た・く・ま・し・いを漢字で書くと「逞」となる。この漢字の意味するところは、私の考えでは「自分というものをしっかり示して道を歩く」ということで決して無理をしたり、変に力むことではないと思います。

「腕白でもいい 逞しく育ってほしい」という言葉が大きなハムにかぶりつく姿と一緒にテレビのCMに見るとき、私はいつもいやな気持を覚えるのです。それは、子どもがどろどろに着物を汚し、手足をよごし、大きな肉のかたまりにかぶりついたら、それでその子が「逞しくなった」と思わせる低級さについてです。

そんなことは、およそ、人間の逞しさ、とは関係のないことで、それは、どぶから這い出て来た、うすぎたない犬や猫が腹をすかして肉のかたまりに、しゃぶりついているのと少しもかわらないと思うからです。と申しても、私自身、上品ぶって、このようなことを言っているではありません。

私の言いたいことは、着物や手足、顔などを汚し、肉の大きなかたまりに、かぶりつくならその子は「逞しい」と決して思うな!! ということで「逞しさ」の本当の姿は、そこにはないのだ!! といいたいです。

では「逞しさ」とはどういうことなのか、すでに漢字の意味について述べましたように、①に、正しくものを見て、② 雄々しく自分を、ことがらに対処させて歩み進み行くことです。そのためには手足が汚れることもありましょうし、着ているものがやぶけることもあるでしょう。身体も強くなければならぬと思います。しかし大切なことは、正しくものを見る知性・雄々しく対処する意志力です。

つまり、逞しさたらしむものは、正しくものごとを見る知性とことがらに雄々しく対処

してゆく意志力と、さらに、それらを運んでゆく強い身体だと申せます。

従って、この三つのことを身につけさせることが「たくましさを育てる」ということになりません。ではどうすればよいのか、それを只一こと言うならば、

「親は、決して手を出さず、こどもに自信に考えさせ、やらせ、その様子を見て、はげまし、ほめてやり、こどもに自身に、自分はやった!! と成就のよろこびを体験させてやること」です。

子どもが、以上のような「逞しさ」を身につけることは、これから歩み行く人生に於ける、その子の資本をもったようなものです。

人生に於ける、いろいろな苦しさを一一つ一つのり越えてこそ、人間のすばらしさ、生きる喜びを味えるものです。この人生の一つ一つの苦しみをのり越えさす力、人生に喜びと希望を生むものこそ、その人間の「逞しさ」であります。

言葉づかい

「幼稚園に行くようになって言葉づかいが悪くなった」ということをよくききます。

ところで、四才前後という年令は、ちょうど聞きたがり、しゃべりたがりの時代です。

加うるに、幼稚園などの家の外の世界がひらけ、友だちも多くできてくると、言葉の数はおどろくほどふえていき、従って、悪い言葉づかいも多くなって来ます。

ですから、考え方によっては「うちの子どもは、わるい言葉づかいが出来るほどに成長したのだ」と親は感謝してもよいのです。しかし、やはり悪い言葉は悪いとはっきりしなくてはなりません。その場合あたまごなしに「そんなわるい言葉はいけません」と、むきになって叱ったりすると、子どもは、むきになって叱る親の姿がおもしろくて、かえってますます使ってみたくなり一向によくはなりません。

ですから、その場合は、お母さんは落ちついて「そんな言葉は、お母さんはきらい。使うのはやめましょう」と、一言はっきり言いきって、あとは、いくらお母さんの気をひく

ために、わるい言葉を使っても全く知らぬ顔をして一切応じないことです。

周囲のものが一切相手にしなければ張りあいがないので、やがていわなくなってしまうでしょう。

それに、ここで一番大切なことは、家の人たちが日常どのような言葉づかいをしているか、ということ です。親たちが、いいかげんな言葉づかいをしていて、子どもにだけ、よい言葉を使いなさいとか、人の前に出たとき急によい言葉を使えとか言っても出来るものではありません。

子どもの言葉は、最後には、その家の人々が使っている言葉づかいになります。

ですから、子どもが、いくら悪い言葉づかいをしても、家の者達がしっかりした言葉を使っていれば、子どもの年令がすすむにつれ、自分の使っている言葉と家の者たちが使っている言葉とに異和感を抱き、こんな言葉は使わずにおこう、使うのは恥ずかしいと感ずるようになって、自然と使わずになるものです。

ここで、ごあいさつについて一言記しておきたいと思えます。

「おはようございます」という挨拶など子どもの口から自然に出るようになるためには、朝はじめて子どもと面を相せた時、必ず親の方から「○○ちゃんおはよう」と言葉をかけてやることです。

親がろくにあいさつもしないで、子どもにだけ、それを強いて「言え」「言え」と言っても、しよせんはむりというものです。

先ず、親が、笑顔で一言「おはよう」と声をかけてやってほしいと思います。すると必ず「お早よう」という答えが返って来る。

ここから、あいさつのしつけ、習慣は、はじまるのです。

情緒不安定児

情緒不安定な子どもとは、一口に言って、子どもの行動などにムラが多いのがその特徴です。

では、なぜそのような子どもになるのでしょうか。お母さんは、「うちの子は困った子だ」と言う前に「情緒を不安定にするような原因が、子どもの側ではなく、子どもをとりまく環境のほうにあるのではないか」ということをよく反省してみてくださいと思います。

しかし、それ以前にお母さんが知っておいてほしいことは、子どもの情緒の発達は、いつも安定した状態で上昇していくのではなく、むしろいろいろと振幅・動揺しつつ発達していくものである。ということなのです。これは正常な発達の姿なのですが、そのことを知らないで、少しぐらい子どもの情緒にムラがあるからといって、すぐに不安定な子、困った子ときめつけてしまうのは誤りです。

ゲゼルという米国の学者が、子どもの情緒の発達の振幅について研究しています。それによると、二才半〜三才の子どもは、素直かと思うとまったくききわけのない状態を示します。三才〜三才半までは、かなりききわけのよい状態が現れますが三才半をすぎると泣いたり怒ったりの状態が一時強くなります。四才をすぎると再び落ちつきますが、五才になるとまた、めそめそ泣きが多くなったりします。これは不安・恐怖についても同じような動揺があらわれます。勿論これには個人差があることは言うまでもありません。

ところで、子どもを不安定にする環境的原因について記してみたいと思います。

子どもの環境とは、主として家庭即ち家族の人間関係の不安定、つまり夫婦関係・姑嫁関係、親子関係などの不安定は、子どもを不安定にします。

子どもにとって決定的な影きょう力をもっているのは母親です。母親が安定していれば子どもも安定します。そして、たいていの場合母親の安定は夫との関わりでの安定であります。夫婦関係の不安定は母親をして子どもの養育に一貫性を欠かしめたり、過保護にせしめたり、干渉過多にせしめたりします。子どもも落ちつきがなく、ひっこみ思案になった

り、いろいろなクセをもったりします。

要するに家庭内の人間関係に調和を保たせ安定したものにすることが、子どもの情緒を安定せしむる絶対条件だということです。

それにしても、母親というものは、ただ子どもに対してであるばかりか、夫に対しても、時として姑に対しても安定せしめるような役割をもっているのですから、それは大変な責任です。しかし、この役割は責任であると共に持権のようにも思えるのです。

その意味から、お母さんがたの人間としての成長が望まれます。

それは、知識としての知恵の成長でなく、人間としてのゆたかな人生の慧智に於ける成長です。

柔かい布地を偏愛する子

感觸の柔かい布地などを異常に好み、眠るときなどそれを口にくわえたりして、はなそうとしない子どもがいます。その布がだんだんよごれて来て不衛生なので、お母さんはそれを取り上げようとしたりすることがあります。

こんなことは二才、三才の子どもに多くありますが、ときどき四才、五才の子どもにもあります。

その場合、不衛生なものとはともかく、むりにやめさせないほうがよいようです。むりにやめさせても、かならずほかのくせがはじまつたりします。つまり、その子どもには、何かそのようなことをしていなければ、安心出来ない原因があるのであって、大切なことは、その原因をお母さんは探しあててやることです。

一般的に言つて、やれ原因がどうのこうの、真けんに考える必要はないので、そのうちにあとかたもなく消えてなくなつてしまうものです。

しかし、なかなか消えない場合は、次のようなことが考えられます。

① お母さんの差別愛ということ。誰も子どもを憎いと思う母親はいませんが、子どもの側から見たとき「わたしは、かわいがられていない」と感じる場合があります。このような不安・不満を子どもがいだくとき、その不安・不満をまぎらわすために、はじめたことが習慣化してしまった。ということ。

② 自分自身の興味のあることに没頭できない習慣のついてしまったような子どもに生じます。

たとえば、いつも体裁やかたちをつくることばかり強制されている子ども、つまり、つねに「ああしなさい」「こうしなさい」と、お母さんらにおせっかいを受けている子どもは、だんだん、ものごと集中できなくなり、自分の中にもつた集中して興味あることをやりきれないエネルギーが、異常な好み方をするという行動をおこさせるのです。

③ 家庭内の不和から来る不安定感から逃げる手段として行う。

ご主人との意見の不一致に於ける夫婦の間の議論、しゅうと嫁との間のゴタゴタ。

以上特に三つのことを上げましたが育児の上で大切なことは、子どもの起す現象を一つ一つ見て、そのことだけを何とかしなくてはと考えるはならないと仰うことです。常に「なぜこの子は、こういうことを言うのか。」「なぜこの子は、こういうことをするのか。」と、それによって来る原因を探すことです。

その場合、大方は親自身の子どもに対する関わり方にあると気づきます。

よりよく子どもを育てると言うことは、親自身がゆたかに成長するところにある。とい
うのが私の育児論の基礎であります。

相互に人の子の親、又は大人として成長して行くように心がけたいと思います。

子ども の けんか

—その必要性と効用について—

五、六人も子どもが遊んでいると、そのうちにならず、けんかをはじめます。

けんかの原因は幼児の場合そのほとんどが自己主張のぶつかり合いです。

しかし、子どもたちは、自己主張のぶつかり合いのけんかを通して、この社会には自分ひとりが生きているのではないこと。それ故に、自分を主張すると同時に、ある点では自分をおさえ、がまんしなければならぬことなどを、実際の体験により知っていくのです。

つまり、けんかとは子どもに、どういうことをしたら、ひとからきらわれるか、わがままは、ゆるされないその他の社会のルールなど、いろいろな生きてゆくために必要な心得といったものを字ばせ身につけてくれるものなのです。ですから、子どもがけんかをするからといって、頭ごなしにおこる必要はありませんし、ことさらに心配することもいりません。

むしろ心配なのは、けんかをしない子どもの方です。もしけんかをしない、というこ

とが自己主張をもたず、ひとの主張にふりまわされたり、自分のしたいこと、自分のほしいものを求める気の弱さということであれば、そのような子は「おとなしい子」ではなく「たよりない子」なのです。

そして、そんな子は、一年生で学校へ行くようになって「いじめる」とか何とか言っ学校へ行きたがらない子になってしまいます。

一年生ぐらいで、アカンベーをしたり、少しつついたりの一見いじわるに思える行為は、仲よくなりたいたい信号のようなものなのです。そのことは幼児の時に適当にけんかをして来た子どもは理解できるのです。

また、小学校も三、四年生になりますと、一生の間で最もよくけんかをします。そして、その原因は、ぶつかったとか、ものをとったとか言う具体的なことです。

しかし五年生になりますと、けんかのやり方も口論になり、批評したり、悪口を言ったり、もっぱら精神的になってきます。そして仲よくなるのも、物のやりとりの三、四年生とちがって、先生からかばってやるとか、宿題を手つだってやるとかの精神的なことから

はじまります。

このような、けんかの段階をふまずに成長した子どもは、友だちづくりがおくれてきます。中学生になっても、ものをやることにより友だちをつくろうとしたりします。

とにかく、子どもが健全な発達をしていくためには、けんかを通して友だちづくりをし、自分の社会性を育ててゆくことが必要なのです。ですから、子どものけんかに親が出て、かばったり、叱ったりすることは百害あって一利なしです。

強情でいいだしたらきかない子ども

—その原因を知り正しく対処するために—

幼児の強情の原因はいろいろありますが、だいたい次の三点のことが考えられます。

① わがままをおそうとする場合

② 親や教師に対する反抗から生ずる場合

③ 自分は悪くないのに叱られたと思っっている場合

さて、①の場合は、親が子どもを甘やかすか、養育態度の誤りから生じたものですから、親はその点に気づいて、子どもに対して毅然とした態度で切し、たとえ泣こうが、わめこうが全く無視し通すことが大切です。つまり、わがままは許されないのだ、ということをお子に自覚させることです。

②の場合は、親などに自分がかわいがられていないと思っっているときなどに起ります。

親の方では、子どもをかわいがっているつもりでも、子どもの方でそのように思っなければ（つまり親の愛情が十分、子どもに通じていなければ）子どもは、自分がかわいがられているとは思ってはいけません。この点、親の方でよく留意する必要があります。ですから出来得るかぎり、しかったり、こごとを言ったりすることを止め、ほめたり、認めたりしてやることで、自分がかわいがられているのだということをお子に自覚させてやることです。

③の場合は、親が子どもの表面的な行為のみを見て、しかったり、とがめたり、中止させたりするときに起ります。

親は子どもを叱るとき、子どものいい分をよく聞いてやった上で自分の態度を決定すべきです。それをしないで一方的に、感情的に叱っているのは、ますます子どもを強情にします。

以上三点について考えて来ましたが、ある子どもは①の場合、他の子どもは②の場合、又他の子どもは③の場合ということは出来ませんが、ときどき①②③が重なりあって、その子どもの強情を生んでいる場合があります。ですからお母さんたちは、よく自分の育児態度を反省して、正しく、効果的に対処して下さい。

偏食をする子ども

誰れにでも、食べものについての好ききらいは、少しぐらいあるものです。

しかし、あまりにも好ききらいが多く、しかもその程度が強い場合は栄養のかたよりが出来て、健康上によくありませんので、このような偏食は正さなければなりません。

それにしても、偏食する子どもをみていると、性格的には神経質で、内気、内弁慶の者に多いようです。

つまり、子どもの偏食傾向は、その子ども自身をもって生れたものではなくて、両親の養育態度により、つくられた傾向だと思はれます。その養育態度とは、甘やかし、心配のしすぎ、過保護といった態度です。従って偏食ということは、そういう傾向の親と、そういう傾向の子どもとの間に、生れて来る問題であると申せます。ですから、偏食自体を問題とするより、その底の問題である親子関係、養育態度を検討し、改めてゆくことが大切です。

「うちの子は、好ききらいが多くて困ります」

という母親は、母親自身が子どもを好ききらいにしてみましたのだ、ということに反省する必要があります。

子どもが何とも思っていないのに「食べられなかったら、食べなくていいのよ」などと
言ったり。また、「よく食べる（飲む）わね、お父さんもお母さんもきらいなのに」な
どと、食べさせないようにするような暗示を与えてしまう愚かな親がいたりします。

ましてや、親自身が偏食していて子どもだけに、なんでも食べなさいと教えることは出
来ません。

少々子どもに偏食があったとしても、それを取りたてて騒ぐよりも、一家が楽しく、に
ぎやかに食事をいただくふんいきをつくり出せたら、知らぬまに、子どもの偏食は消えて
なくなると思います。

たとえきらいなものでも、幼稚園にもって来て、友だち同志のたのしい会話の中や、教
師との対話を通して、たいていの子どもは、何んでも食べてしまいます。